様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００８６５

研究課題名（和文）第二言語学習者の機能範疇の習得について

研究課題名（英文）The acquisition of functional categories by L2 learners

研究代表者
野地　美幸（NOJI, MIYUKI）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：４０２５１８６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　L1日本語の英語学習者(JLE)による機能範疇Ｃの習得に関連して，ドイツ語で観察される部分的wh移動やwh複写が確認されること，そしてまたwhyの複合疑問文より単純疑問文でより多くの倒置の欠如が生じることが判明した。さらに，初級のJLEが産出するtough構文の数は限定的であったが，使用された述語が教科書分析の結果と合致し，インプットの影響が示唆された。同時に誤用を含めた全体のtough構文の産出についてはL1の影響も示唆された。機能範疇ｖに関しては，自他交替可能な非対格動詞の自動詞用法に困難が報告されていたが，教科書分析の結果インプット頻度が重要な影響を与えている可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　機能範疇Cは英語の疑問文等で見られる主語・助動詞倒置や演算子移動を引き起こし，機能範疇vは動詞の自他交替を担うと考えられている。本研究ではこういった現象に関して違いを示す日本語が母語の英語学習者がこれらの機能範疇の習得に際して様々な非目標言語的な振る舞いを示すことを明らかにした。またその原因についても追及を行った。これらは今後の研究の進展につながる足掛かりとなるであろう。一方，機能範疇Cとｖの習得に関連して学習者が示した様々な困難を明らかにし，考えられる原因として提示した内容に関しては今後英語教育の領域でより良い指導につながる可能性が期待できるであろう。

研究成果の概要（英文）：　As for the acquisition of C, L1 Japanese learners of English (JLEs) were found to use partial wh-movement and wh-copying as in German. Another finding was that non-inverted “why” questions were produced more in simple wh-questions than in complex wh-questions. Thirdly, the predicates in tough constructions produced by JLEs at a relatively early stage of acquisition were congruent with the input data from English textbooks, which suggests an influence of the input. However, various linguistic properties observed in learners’ data including errors were rather consistent with L1 Japanese, which suggests the influence of L1 as well. As for the acquisition of the functional category v, JLEs were previously reported to show a difficulty in the intransitive use of English unaccusative verbs that also have a transitive use. The results of a textbook analysis suggest the important role of input frequencies in the degree of the difficulty.

研究分野：第二言語習得、言語学

キーワード：wh複写　部分的wh移動　whyの倒置エラー　tough構文における演算子移動　残留代名詞　Ｌ１の影響　インプットの影響　自他交替可能な非対格動詞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

L1 英語の WH 疑問文の習得に関して，疑問詞の種類によって倒置エラーの起こる頻度が異なることが報告され，その原因について議論がなされていた（Conroy & Lidz, 2007; Thornton, 2008)。一方,L2 英語でも類似の現象が観察され（White, 1992; Spada & Lightbown, 1993,1999), L1 日本語の L2 英語学習者に関しても倒置エラーが観察され（Sakai, 2004, 2008)。筆者も(2015 年）の研究で，L2 英語の疑問文の産出に関して初めて，L1 英語と同様に特に why 疑問文で倒置なしの割合が高くなることを報告し，「統語的アプローチ」を支持する議論を行っていた。

２．研究の目的

日英語の疑問文形成に関して倒置の有無といった違いをもたらしている機能範疇 C が L2 英語の場合にどのように獲得されるのか，そしてまた日英語の主格照合に関する違いをもたらしている機能範疇 T が L2 日本語の場合どのように習得されるのかを明らかにすることである。(なお，感染症の流行により T ではなく *v* に変更して研究を続行した。また疑問文と同様に演算子移動が関与する tough 構文についても調べた。)

３．研究の方法

機能範疇の習得に際してどのような現象が起こるのかに関しては，L2 英語学習者に誘導産出タスクや容認性判断タスクを実施したり，発話コーパス資料を分析したりした。また，確認できた現象に関しては，L1 の影響等を調べるため教科書分析も行った。

４．研究成果

機能範疇 C の習得に関連する研究成果は(1)-(3) の通り，また機能範疇 *v* の習得に関連する研究成果は(4)の通りまとめることができる:

(1). L1 日本語の学習者は英語の長距離（wh 移動を伴う）複合 wh 疑問文を習得する際に，主節の文頭に作用域標識の what が，そして埋め込み文の文頭に疑問詞が現れる What do you think what present he likes best?のような文を産出することが報告されている（Yamane, 2003; Schulz, 2011)。このような部分的 wh 移動は L1 にも目標言語にも存在しないがドイツ語の方言で許容されていることから，L2 が普遍文法によって制限されている可能性が取り沙汰されている。本研究は，日本人英語学習者が，部分的 wh 移動と並んでドイツ語で許容されるもう一つの wh 複写（wh-copying）の様相を呈するのかを調べた。Thornton（1990）に倣った誘導発話タスクに参加した 19 名の日本人英語学習者の産出資料を分析した結果,少数ではあるが部分的 wh 移動と wh 複写という日本語にも英語にも見られない逸脱が観察された。そしてこの逸脱が自然言語の可能な選択肢の範囲内に収まるものであるとの示唆を得た。

(2). L2 英語学習者が wh 疑問文を習得する際に,英語児と同様に,Why children like McDonalds? や Why the kids jumped on the bed?のような倒置無文を倒置有文と並んで受容・産出し，疑問詞が付加詞か項かによってその割合が異なること，また，疑問詞が why の場合，非主語の what・who の場合と比べて倒置無文の容認・産出の割合が高くなることが報告されている（Lee, 2008; Noji, 2015)。本研究では，why と項の疑問詞で倒置無文の割合が異なる原因に関して，もともと Stromswold（1990）と De Villiers（1991）が L1 で提唱し L2 でも議論になっている統語的アプローチの妥当性の検証を行った。59 名の日本人英語学習者（大学生・大学院生）が，短距離・長距離 wh 移動を伴う why・what 疑問文の産出を誘導する口頭英訳タスクを用いた実験に参加し，その結果は統語的アプローチを支持するものであった。

(3). 日英語の tough 構文は演算子の移動の有無等に関して本質的にかなり異なっている。本研究は，L1 日本語の学習者（中高生）による英語の tough 構文の産出，そして L2 インプットと L1 がそれに与える影響を調べた。JEFILL コーパスと英語の教科書を分析した結果，中高生の英語の tough 構文の産出は限定的であったが，使用頻度が高い述語が教科書分析の結果と合致したことから，インプットの質が影響を与えているとの示唆を得た。一方，インプットは誤文を説明できず，正文に関してもインプット量が十分ではなかった。また，産出された tough 構文の特徴は正文・誤文共に L1 と合致したことから，L1 転移の可能性があるとの示唆も得た。さらに，誤文で見つかった残留代名詞に関して追実験でその存在の検証を行った結果，学習者の中間言語がそれを許容している可能性が示され，学習者の産出する tough 構文も英語母語話者とは本質的に異っている可能性があることを示した。

(4). 自他交替可能な英語の非対格動詞の第二言語習得において，学習者が自動詞用法を容認せず，受動態を過剰使用する傾向が報告されている（Otaki & Shirahata 2017 等)。本研究では，先行研究の実験における動詞間の自動詞用法容認度の差が，インプット中の出現頻度の影響に

よるものであるという可能性を検証するため，中学校・高等学校の英語教科書を対象に，各動詞の自動詞用法，他動詞用法での出現数を調査した。結果は予測通り，先行研究において自動詞用法の容認度が高かった動詞については，教科書中で自動詞用法での出現数が多かったのに対し，自動詞用法の容認度が低かった動詞については，自動詞用法での出現数が少なかった。この結果は，自他交替可能な非対格動詞の習得において，動詞ごとの自動詞用法でのインプットが重要な役割を果たしているということを示唆するものである。

＜引用文献＞

Conroy, A. & Lidz, J. (2007). Production/comprehension asymmetry in children's *why* questions. In A. Belikova, L. Meroni, & M. Umeda (Eds.), *Proceedings of the 2nd conference on generative approaches to language acquisition North America* (pp.73-83). Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.

Lee, S.Y. (2008). Argument-adjunct asymmetry in the acquisition of inversion in *wh*-questions by Korean learners of English. *Language Learning*, *58*, 625-663.

Noji, M. (2015). The acquisition of inversion in non-subject *wh*-questions by Japanese learners of English: An asymmetry between *why* and argument *wh*-questions. In H. Egashira, H. Kitahara, K. Nakazawa, T. Nomura, M. Oishi, A. Saizen, & M. Suzuki (Eds.), In untiring pursuit of better alternatives (pp. 288-298). Tokyo: Kaitakusha.

Otaki, A., & Shirahata, T. (2017). The role of animacy in the acquisition of ergative verbs by Japanese learners of English. *ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan*, *28*, 177-192.

Sakai, H. (2004). Testing the validity of processability theory: An analysis of English utterances by Japanese university students. *ARELE*, *15*, 11-20.

Sakai, H. (2008). An analysis of Japanese university students' oral performance in English using processability theory. *System*, *36*, 534-549.

Schultz, B. (2006). Syntactic creativity in second language English: Wh-scope marking in Japanese-English interlanguage. *Second Language Research*, *27*, 313-314.

Spada, N. & Lightbown, P.M. (1993). Instruction and the development of questions in L2 classroom. *Studies in Second Language Acquisition*, *15*, 205-224.

Spada, N. & Lightbown, P.M. (1999). Instruction, first language influence, and developmental readiness in second language acquisition. *The Modern Language Journal*, *83*, 1-22.

Stromswold, K. (1990). Learnability and the acquisition of auxiliaries. Unpublished PhD dissertation, MIT, Cambridge, MA.

Thornton, R.J. (1990). Adventures in long-distance moving: The acquisition of complex *wh*-questions. Unpublished PhD dissertation, University of Connecticut.

Thornton, R. (2008). *Why* continuity. *Natural Language and Linguistic Theory*, *26*, 107-146.

White, L. (1992). Long and short verb movement in second language acquisition. *Canadian Journal of Linguistics*, *27*, 273-287.

Yamane, M. (2003) . On interaction of first-language transfer and universal grammar in adult second language acquisition: *Wh*-movement in L1-Japanese/L2-English interlanguage. Unpublished PhD dissertation. University of Connecticut.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 野地美幸	４．巻 39
２．論文標題 日本人学習者による英語の長距離wh移動の習得：部分的wh移動とwh複写に焦点を当てて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 上越教育大学研究紀要	６．最初と最後の頁 155-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野地美幸・中島基樹	４．巻
２．論文標題 日本人英語学習者によるwhy・what疑問文の倒置の習得：短距離・長距離wh移動の違いに焦点を当てて	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本英語学会第159回大会予稿集	６．最初と最後の頁 222-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中島基樹・野地美幸	４．巻
２．論文標題 自他交替を許す英語非対格動詞の習得におけるインプット頻度の影響	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本言語学会第163回大会予稿集	６．最初と最後の頁 213-219
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野地 美幸、藤井 みずほ、河内 健志	４．巻 165
２．論文標題 L1日本語の英語学習者によるtough構文の産出におけるインプットと母語の影響	５．発行年 2024年
３．雑誌名 言語研究	６．最初と最後の頁 33～57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11435/gengo.165.0_33	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 野地美幸・五十嵐みずほ・河内健志
2．発表標題 母語が日本語の英語学習者によるtough構文の習得: インプットと母語の影響
3．学会等名 新潟大学言語研究会
4．発表年 2023年

1．発表者名 中島 基樹・野地美幸
2．発表標題 自他交替を許す英語非対格動詞の習得におけるインプット頻度の影響
3．学会等名 日本言語学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 野地美幸・中島基樹
2．発表標題 日本人英語学習者によるwhy・what疑問文の倒置の習得: 短距離・長距離wh移動の違いに焦点を当てて
3．学会等名 日本言語学会
4．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中島　基樹 (Nakajima Motoki) (60609098)	長野県立大学・グローバルマネジメント学部・准教授 (23603)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関